

駿臺雜話

五

26



駿其公雜話卷五目錄

駿基雜誌卷五目錄

信集

月夢世此形見

遍照の建

詩文此評只

六義乃沙汰

多錢若賈

曇陽大師

言ハ身此文

在物人と福

離騷の秘事

世とそくをとそく

倭歌の感真の益あり

作文と讀書のわち

文章此盤裏

寸鉄人とそのあり

一月此澤

年よをたう

壬子試後の綱附

壬子試後の綱附

古くは

入物

貴

子

子

子

子

子

子

一日

一日

一日

一日

一日

一日

一日

一日

一日

一日

駿芝雅話卷五

たうと月をたれしやとてあはれなる老の心と月とをたれ

さし侍らばもや其まじきく子載無窮の感もあはれを六む
月との老やなるまじきくは。但月夜をたれとて今更
物へ侍ら。昔も其時あやしく八月十五夜舞宴の部を。偶むらひ
指するにばら武士の丁字初るぬ。月夜はくくや。月と月
徑をくく入。おれは。名老く。月夜と。よ。又月やのく。く。よ
ア。おれは。あ。切。と。も。鼻。長。い。の。と。わ。ん。や。く。た。ん
よ。金。様。い。け。は。き。く。く。皆。吉。を。食。ひ。ぬ。お。れ。は。た。い
か。く。今。も。の。六。世。信。月。夜。賞。して。光。の。わ。り。き。ま。じ。く。新。の。き
よ。き。よ。ら。く。良。夜。と。く。あ。お。よ。る。物。喰。酒。の。と。や。ま。く。て。法
の。と。れ。と。事。を。た。れ。た。が。お。す。人。を。信。る。よ。部。く。く。よ。ぬ。や。又。愛

月夜をたれしやとてあはれなる老の心と月とをたれ

観くわんして青天有月来幾時といひ。此こゝに於おける。氣象ききやうのさす、枝えだ影かげの

圓まるく。詩うたは豪うたう蕩たう超こ逸いつするも。如ごと此こ詩うた人の及およびます。之これに如ごとく
しよよと李り杜とと。杜甫ふふよよと杜甫ふふも。けけ中ちゆうくくをを傳でんはは詩うたをを
李白らいていの詩うたも。古今ここん流りゅうのああとと感かんするすることことも。後ご代だいと傳でんののことこと
と。前ぜんじじくく楚そ辭ととと。注ゆ者もの余あ弗は及ま其その若ごと吾われ不な聞きととししてて
屈くつ子しととおおくくるるはは感かん多たかかんんおおるるはは二に句く此こゝ意い境けい
よよ屈くつ子し一いち代だい知ち已まかかりりとと。古こ人にんとと流りゅうははわわんんとと持も
多たととわわんんとと一いち度だいわわんんとと。注ゆ者もの余あ弗は及ま其その若ごと吾われ不な聞きととししてて
又また其その世よままのの人にんととわわんんとと家かとと心こゝろをを同どう志しすすとと。わわんんととわわんんとと其その
人にんととままのの心こゝろをを離はなれれとと。ああんんととわわんんとと。屈くつ子しとと限かぎららずず。古こ今こん心こゝろわ
るるはは二に句く此こゝ意い境けい

後漢書 卷之五

四

ありと感ゆく是ゆのいづかきも今と事れ昔かきさば
 けさの代り又わあしく月を射りて今と事れ又わあしく月
 へさす我共世を照らすとささくわはくさきさくさくさくさ
 月さたさきものこころさくさくさくさくさくさくさくさく
 月さたさき事代さくさくさくさくさくさくさくさくさく
 せうさあさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 考(身)はくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

離騷の秘事

法ありて屈子かんとて月夜に母をわたりてさきさくさく
 今の世はあつたさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

ハ吾石圃といふはさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

のちこそとくくは源ありあつく本は根わけあつく。大切のこゝ

神のわらふこときりて離強は秘すらん。其秘事といふはわらわら
わらふ多々為瑞の秘語也。帝高陽之苗裔也。朕皇考曰伯
庸。とて世に伝へて。いふに。是をよみ。父を思ひわらふをわ
らふ。又六朝の古史記つ地ふら。日月車は天子の王孫と名ふとは。
其心よりちり多し。すあくわらふこと。人々を思ひわらふも。凡親と
志するも。身もあらむ。物くち。人々も。崩る。我う。屈子も。其
う。生れ多し。く名多し。き多し。すも。父也。あ。も。き。わ。わ。や。う。け。け。ら。
い。ま。ま。と。の。ち。さ。ん。け。生れ多し。の。う。む。き。や。思ひ。け。ら。く。う。思。か
く。い。ひ。わ。ら。ふ。し。ら。と。い。わ。わ。ら。ふ。も。や。る。も。其。地。白皇。覽。換。余。于。初。度。
今。肇。錫。余。以。嘉。名。各。余。曰。正。則。字。余。曰。靈。均。と。い。ひ。又。次。く。

皇紀卷之五十五

六

て一巻に凡そ何れ程の事か、
離騷

とあるを、
あつと海の中。又、
一と氣を、
てゆると事と、
あつと程の、
事や、
と、
先儒が論、
十年書、
一巻

...

遍照の忠かみ

翁又つとて父母と人のとをわすれ人窮しては父母がふしこの
 天啓ありて自給の難きを古き人に孝子の常は父母と母
 へと先をん親をて父母は名をわすれんあつたをわすれん
 果し親をて父母は恥をたせん幸とあつてくをわすれん
 こそあつて孝と百約の中にもすむやうにさきハ屈子於あつて
 父をたつてあつてその君は忠われの根をてゆきと知るるに
 うー良卒の宗貞

深草北帝よあつてなをて。倭よあつて。倭は通照定かんに
 一の遍照へ死あつてをて。父母と母いそ。

一々の遍照一死お終をそく父母を思ひそく

多しちひひがらまきく一もいはれが、くろかりたて
すやわらへんまては沸る一く世を扱ともそのまはよわると
父母ともいひゆれや。天性は父母と志うに母ひさる地れゆれ
あらゆきふ親とすて子成すてくお家すると真此道入とすれ
くせかひりしもまふ人の性と賊賊とんとすれもけあふが
今一を古今此賢人宗身と一代の寵臣其人物のやうな
の侍中とわらわらふ。けいも名卿世派の事よはまねたその父
母はんがまはかく國はく。あまのりりやうやうを
けしめ今窮一く。神をも離騷と作て父祖とあひ
倭歌と詠一く父母まうあそまら似てまともな子とあはれ

國に報して死して家聲を墜さすは我父母にけり。是を
伴ひし人の中にも宗廟を奉じ世世の事に掛
の事やかるべき事なれば。多しは此の如く。報をわねぬものに
すむべき。宗廟の如く。遍照の教をわねぬ。よりの事よは
にさるべき。

多しは其の如く。宗廟を奉じ世世の事に掛
多しは其の如く。宗廟を奉じ世世の事に掛
報をわねぬ。父母に報恩とすむべき。名をわねぬ。宗廟を
佛の如く。惑く。天竺の音す。今又宗廟とさる。宗廟を奉じ
か。貴く。いづくか。

多しは其の如く。宗廟を奉じ世世の事に掛
多しは其の如く。宗廟を奉じ世世の事に掛
多しは其の如く。宗廟を奉じ世世の事に掛

かゝる責を、いさゝかかた

あつちの成。思ふくら。世とす。我。身中。すくえぬ。もの。た。ね
ちれ。い。の。と。や。源平盛衰記。と。う。ま。務。き。い。の。う。く。よ。頼朝敵。に
る。ま。い。ゆ。本。此。穴。の。後。ま。お。を。下。一。敵。に。さ。う。さ。ま。て。す。て。よ
自。殺。し。乃。ん。や。す。る。時。終。の。中。は。佛。に。小。像。を。ゆ。い。添。し。と。首。を。敵
に。取。え。ん。時。大。将。軍。此。亦。為。ま。わ。ら。れ。い。を。ま。ん。や。と。う。の。と。ま
重。か。く。い。お。ま。う。と。か。ま。い。は。い。つ。正。し。く。公。か。る。事。此。人。よ。さ。り
ま。す。わ。る。や。佛。像。の。ま。て。後。生。と。あ。す。く。ら。ん。と。お。ま。あ。つ。夫
夫。の。ま。え。さ。う。や。わ。ら。ん。と。う。く。や。思。は。る。ま。は。し。我。さ。う。も。た。あ
や。一。と。ま。け。れ。佛。と。は。ま。の。ま。ま。も。あ。の。と。を。れ。ま。さ。く。え。ゆ。あ。ら。ん
わ。り。の。ま。ま。と。う。く。人。は。羞。悪。の。心。を。同。有。す。や。ら。し。ま。ま。と。ま。り。し。

はまは遍照を父母と思ひて。わがわがやをまじはらふ。か
とに後。頼みと敵とを瘡て。さうやをまじはらふ。は
あつらひのききも奉らふ。まじはらふ。

世とすてく。身とすてり

さうして。遍照。世とすてく。身とすてり。まじはらふ。か
んまをまわらふ。まじはらふ。頼みと敵とを瘡て。さう
するまじはらふ。父母とすてり。思ひおれ。か。まじはらふ。
まじはらふ。まじはらふ。まじはらふ。遍照。れ。まじはらふ。
う。まじはらふ。まじはらふ。まじはらふ。まじはらふ。まじはらふ。
か。まじはらふ。まじはらふ。まじはらふ。まじはらふ。まじはらふ。

まじはらふ。まじはらふ。まじはらふ。まじはらふ。まじはらふ。

かきぬと若此被こけかきき多たよよ若とああつつ此こははけけぬぬ。

そらに多敷おほななよよささるる志しのの心こころををててががううもも家いへととああわわささ
ひひくくああきき成なり業わざふふれれたたうう。ささううてて遍へん照しょう。場ば中ちゆうににあありりややららせせ
わわががままささああままのの序しよよよ謙けん念ねんとと思おもふふ。おおのの同どうああるる。那な集じふ律りつ
よよ給たまははるるとと其その人ひとううにに此このの後のち那なががるるやや。頼たの朝あさややううてて思おも
ここううああららうう言ことば中ちゆうよよ傳つたへへ。弓ゆみ馬ば倭やまと那なががままととここええまましし。よよかかのの魏ゑい々々
細こまららああままささここももかかををららんん思おもふふににああららししてて。言ことば中ちゆうよよ
作しやくららにに浦うら留りゆう山さんととううめめ其そのかかのの群ぐん像ざうとともも人ひとががままああららうう思おも
ううらら。頼たの朝あさももすすててああららううめめとと思おもふふににああららししてて。言ことば中ちゆうよよ
ももたたららうう。ほほううくくううちちああららううととああららうう。中ちゆうににああららししてて。言ことば中ちゆうよよ
信しんのの猶なほととああららうう。言ことば中ちゆうよよああららうう。ああららうう。ああららうう。ああららうう。ああららうう。

後集卷之五

中ら然るにさすけれといひ多き八文元彼は、
はくはあまのりふんは、我

うの爲きよのたのしむといひなれそ爲すやと其人のう高潔は
して氣魄精神あつたやあつたか中此人の道とも、真れ道とも、凡
は、儒乃世のつる道ならぬや、中此人の道とも、真れ道とも、凡
其竹具此の明なれに大なる世といひく浮屠は、爲すも、せ歎
し、は、但者として親親すく佛は、ゆして、我身を、の成るまけ
ひ、を、く、す、ら、世、は、捨、と、も、甚、心、を、着、ま、え、父、の、之、く、く、身、を、は
す、く、物、を、あ、ら、う、身、を、捨、す、て、は、世、と、す、ら、う、之、く、凡、世、は
あ、ら、う、名、利、を、捨、く、も、世、と、す、く、捨、樂、と、稱、く、も、汚、濁、ハ、か、ま、と、身
の、樂、を、因、り、と、同、く、は、れ、ぬ、く、ど、か、よ、も、仏、の、教、と、人、偏、と、能、く、こ、も、
ハ、吾、又、と、す、け、れ、ち、う、く、さ、も、わ、く、ハ、は、れ、ぬ、く、と、く、も、捨、て、あ、や、ら、う、ハ、才

後集巻之五 十一

男女の道も多岐もすべし。多岐なるを頼むくたるを多岐よつあく。多岐此

ふあめよかたして。かたのむんれがーもまーてなれくも私欲は
あうひやま。大罪障さいやと増長す。その心よりく分別して
たけきくよまをいひ。は。婦人怒るん我をたの角して。
よまなけくをまよけれとや。能たすよけ婦人全教誨せし
ハ。穢よか。あくはゆきとも。其身も同い。あとなれとたあはれ。
若もてはゆきり人貴賤男女をへん。いけきも身の苦樂とね。
よし起らぬ。あ。め。智の令つや。け婦人の見悟中も及んぬ。と
あさう人材としやありして。既よりく世と。孫くら。事ははくも
さこそわつら州也。たのやと。かく室のたかろ。めらま。

宇宙依然百代流。道喪かみ文弊思悠。誰知たか天上孤輪月長。

照人間萬古愁

詩書道廢共誰陳。郭說紛々日。競新。明月似知千載恨。

慇懃來照白頭人。

翁自云けつと残しそはすまひもまた。法あるはく漏るけ
子。日月為河傾く。来も既わけなれね。各けり。今下てあるね。

詩文の評只

他日鑑く法ある身令せし。各疑同本流く。作文の終はたふ。
いほり。翁よし。詩文と字向の作事。名揚中。能
る。や。是も藝。遊。其類。名。中。乃。き。さ。ま。は。翁。其。作。文。其。論。之。取
る。や。ゆ。と。之。ハ。翁。先。詩。其。本。と。論。して。法。と。之。百。篇。は。と。う。後。す。れ。よ。

及之。漢魏以後の詩。文理悠暢。意思淵永。少。て。風雅。其。意。

ふやゆとの心先詩本と論して、ゆきと百篇はこころ旅すれよ

及之漢魏以後の詩も。文理悠暢、意思淵永ありて、風雅比楚を
失くさず、一、蕭統の文選よのすむ古詩十九首、を為く、樂府
歌行の詩よ、を、知る、を、志す、は、六朝、を、為く、綺靡、を、き、を、浮
華、を、は、を、一、凡、雅、比、體、を、は、は、は、唐、貞、て、李、杜、と、極
う、は、は、六朝の竹、を、と、一、流、を、は、古、風、を、振、興、せ、を、今、ま
に、く、詩、を、子、を、之、と、唐、詩、を、を、は、は、盛、唐、を、は、は、古、と
さ、る、事、遠、く、や、は、は、風、系、を、守、り、人、情、を、ま、る、ふ、は、は、凡、雅、比、殘
膏、別、積、わ、を、を、お、は、け、を、人、を、感、ず、る、は、妙、わ、ま、は、を、子、を、は、性、情
と、吟、詠、す、を、を、唐、詩、を、捨、つ、を、を、の、は、は、司、馬、温、公、杜、甫
の、國、破、山、河、在、城、春、草、木、深、感、時、花、灑、淚、恨、別、鳥、驚、心、と、を、詩

と歸し。古人此詩之意在言外と貴ふ。山河をよみ六竹也
 かのき事言ひし。草木深といふ人言も事言ひし。不名を
 平時たの嬉しむ者物ありて。そも言ひし。用く然るは。尚
 時流離の情といふ。又此王か整の唐詩と歸し
 や。回風綠衣燕く。碩人せき黍離等此篇。けし言外に窮
 の感あり。後世多や唐人のけしをわす。溪水悠々春自来
 中た之序。懐友といひも。懐友の名云外に。溢あ子。潮打。空城
 寂寞回といふ。身亡といひも。身亡此感言外に。溢あ子。凡人
 此體と得る。言外に。けし。二子此詩ゆ。けし。言外に。言
 中。言外に。言外に。唐詩の妙と云ふ。李白の大原早

秋と賦し。霜威出塞早。雲色渡河秋。夢繞邊城月。心

中々之侍る是中々唐詩の如と云ふ也一李白の大原早

秋之賦ふ々々霜威出塞早さい雲色渡河秋つ夢繞ま遠城月心
飛故國樓ろうとらひげ類此詩々雄壯此氣きととくく務む々々々杜
甫ふ江亭と賦ふ々々水流すい心不競きやう雲在意俱遲ち寂々ま春將晚
欣きんく物自私し々々之之之ひひ類れい此こ詩し々々深遠しんののととくく務む々々々
了了其外王淮わい月落江湖白湖来天地青しやうととひひ杜甫ふ呉楚
東南圻乾坤日夜浮ふ々々孟浩然まう微雲渡河漢わん跡南浦
梧桐ぶどう々々柳宗元りゆう壁空殘月せき曙あけぼの門掩候こう喪秋しゆうととひひ々々子野しや
雅やのの詞しととくく不群ふのの思しとと復ふ々々々宋人そうののててゆゆひひ秋しゆう状じやうの
多たとと写しゃ々々々目め暮ぼ々々わわれれああくく季き盡じん此こをを念ねん々々々とと念ねん々々々わわれれひひ
中ちゆう々々是こ等とう其こ他た々々ををしし々々甚しん於こ此こ也や是こもも創そう々々々知ち々々々杜甫

唐詩集卷之五 十四

秋貞の八首。王恩齡の官初此諸篇と。其體と。そのまゝと。あまも。
 冬其體を解いりて。あまも傑たあらる。そののたうん。あまも。
 中唐より。晚唐より。韋蕙いそ列めい儀曹ぎそうの和わ。易えい蔡さいの文
 章古今は卓たく絶ぜつすやうと。其詩凡ふん雅や中ちゆうの少せう。遠えん如じゆと。まゝと。
 孟郊もう賈島きやうの寒瘦かんしゆう。元稹げんの輕浮けいぶ。白居易へいの淺俗せんじやく。李商隱しの僻泥へきでい。
 温庭筠いんの媚艷めいゑん。詩の厄やくやうと。其作さく多たあらく。盛唐より
 あまもあまも。其大槩と詩す。其を越こす。其格いんと。あまも。
 其あまも。其竹ちやく花か也や者しやも。大だいの聲律せいりつ。拘かう。高白かうはく。あまも。
 性情を吟咏す。其末まつ也や。其あまも。鄭谷ていの雪せつと賦ふ。
 て。江上晚来堪盡處。漁人披得一蓑歸。と他たと。東坡とうの評へいと。

其八村字中此詩や。其。椰子厚こ。他た。千山鳥飛絶。萬まん

て江上晚来堪盡處。漁人披得一簑歸。と他もるを東坡の評と

そハ村字中此詩やもや々。椰子厚。他もる一千山鳥飛絶萬選
人蹤滅。孤舟策笠翁。獨釣寒江雪。といふ詩と引く。別格の事と
して。鄭谷の詩の巧みして信耳中を。猶よるをまもるも子厚の詩を
とて。つゝ六の鄙信わるとも。おほふ。今。東坡の眼力た
らざる。知る。そまよはき。思ふ。細雨湿衣者不見。閑花落地
聽無聲。といふ。盧倫の詩。人にも。勝笑して。信るとや。ん。新。純
と。よ。い。い。お。海。多。い。と。も。や。々。吟。休。す。い。よ。竹。味。や。う。家。此。信。志。南
の。風。衣。欲。湿。杏。花。雨。吹。面。不。寒。楊。柳。風。と。い。ひ。て。清。霰。雨。那。咀。嚼
と。い。わ。り。て。盧。の。詩。中。に。あ。る。を。も。も。さ。ま。は。志。南。の。詩。と。朱。文。公
の。詩。信。ひ。て。さ。ま。ま。さ。ま。い。て。い。ひ。て。其。の。輕。壤。集。と。い。ふ。

東坡詩集 卷之五

十五

て梧桐月向懷中照。楊柳風來面上吹。とて多し見多し又一等
 従容此氣象わす。有るは之とてや。是の情を。故に凡流人豪
 とす。多し。げ人の他句調景趣とも相似く。あつた。之の底よき
 元作。盧は辞をさす。志南康節ハ情をさす。て。情をさす
 わす。さす。言は。新と。辞は。物ハ。理屈ハ。さす。味や。情ハ。故
 多し。意思と。合く。味や。さす。之。月。初。此。人。辞。此。雅俗を
 多し。似。て。さす。又。情。此。中。及。今。世。好。く。讀。と。賦。す。
 人。と。多。し。多。し。唐。詩。と。似。く。よ。似。る。多。し。と。さ。す
 生。多。し。已。俗。腸。多。し。多。し。以。此。行。巧。や。ハ。類。語。と
 き。く。似。る。拈。了。と。揮。洒。と。よ。む。似。る。又。世。一。種。偏。曲。無

實此人わす。ち。多。し。と。名。も。や。く。樂。府。古。詩。の。辞。を。剽。掠。し。て

の風才かやん平易ありて其のまを漢律とし唐詩の上等

中一てそのまを長慶集とのまを以て其のまを其のまを
層淺拙俗ありて其のまを其のまを其のまを其のまを
知然く及く其のまを其のまを其のまを其のまを其のまを
味わく其のまを其のまを其のまを其のまを其のまを其のまを
幸なり其のまを其のまを其のまを其のまを其のまを其のまを
吟詠す其のまを其のまを其のまを其のまを其のまを其のまを
一首あり其のまを其のまを其のまを其のまを其のまを其のまを
此のまを其のまを其のまを其のまを其のまを其のまを其のまを
の早朝大明宮の騎よ千條弱柳垂青煥百轉流鶯遶建章
佩聲隨玉墀歩衣冠身惹御爐香賦一其のまを其のまを其のまを

香煙欲傍袞龍浮
賦ニ岑參ニ金闕曉鐘開萬戶
玉階仙

九天闈闔開宮殿
萬國衣冠拜冕旒
月色繞臨仙掌動

香煙欲傍袞龍浮
賦ニ岑參ニ金闕曉鐘開萬戶
玉階仙

仗擁千官老
迎劍佩星初落
柵拂旌旗露未乾
賦ニ杜甫

旌旗日暖龍蛇動
宮殿風微燕雀高
朝罷香煙携滿袖

詩成珠玉在揮毫
賦ニ杜甫

用元泰平此氣象
目中ニの如クあリて
かキ此下にキ倭歌此凡

情ト殆ト螢燭ト此下にキ倭歌此凡

ハハあのけくははかやまわるて人心起ル並ニあらむはわるえ

回風茶首此詩ト来ル茶首薄言来ル茶首薄言有之と

ふらふらくく是ト婦人此下にキ倭歌此凡

成ル多クからむいちはおりきゆものりと其時代泰平ありて

ふふふふ。是と婦人此の如くも来く日と如く心と月と

然るも此の如くも此の如くも来く日と如く心と月と
婦人今も此の如くも来く日と如く心と月と
ふふふふ。是と婦人此の如くも来く日と如く心と月と
は雨服を着て幸などいやはやくつて感ゆる。某昔此の如く
よく、かたはる。其の古今集此の如くも来く日と如く心と月と
お月と一唱三歎するはよく

よく、かたはる。其の古今集此の如くも来く日と如く心と月と
お月と一唱三歎するはよく
よく、かたはる。其の古今集此の如くも来く日と如く心と月と
お月と一唱三歎するはよく

後集巻之五
上八

新編 古今集 卷之五

かろくけ歌と吟すも八有流此奇構にやの微と感すし。

世中ふさしぬまのまはやくもくはせ世とのみ人のまはあ。

け歌と吟すもは若き其親の情と感すし。

風ふけは真はけ彼多のた山勢守も君の心とけりん。

け歌と吟すも八貞婦此思史の情と感すし。

志とくも後とちや女子とちひさや雪ゆもゆく。志をん

しとけけちと吟すもは君子不志故重の情と感すし。け歌も

もな歌多の歌多し。古今集以後八代集よりかくわけはあ

るくは。中々常によくはす。さう一首あり。鎌倉の代實朝の

歌。

古今集の歌は多くはけり。其の歌は多くはけり。其の歌は多くはけり。

新古今和歌集
卷之五

十一

胡日むけ。まほしけ山ろ。さうらふ心。けさやうきさね。中をまはれ。
 いらまあふ。わやあやか。ほれ。あまのあま。あまのあま。あまのあま。
 遊丹面。さうらふ。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。
 夕さまけ。つひに。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。
 秋風。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。
 津の國。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。
 約とやく。袖。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。
 乞食。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。
 えり。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。
 西り。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。

うさも。うらも。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。
 さあ。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。

よきはあけはなういふ織物にぬきわけあそびなる也よそと之緯と

出之経之緯を合せく義と之経を首よりと之を結北郡と
まは格別なり三緯ハ每章詩の仕立より之の事也織と葛章
卷耳なる此詩はあそびを主とする縁するといふやうは身代は
ハはあけはなうき體もいなる也他物もこれなるの如きは
宮人冬蠶の織り冬蠶の多子なるを店也の子孫多きは
婦人柘杵を織り柘杵は漂流するを已ますといふものなり
まは比するをいふ也すくに比する物もわらう別よ如きといふ及ん
身と他物とをいふ也其関雉の詩は関雉あり雌鳩なり
と之を窈窕たる淑女と身と柘杵は此葛章と君
福履とを記しあそびとを記しあそびとを記し今結六

仁徳帝此御即位也すくやと。...

龍波清よすくやあ此ぶぬゆらもま。あちちちちとすくや
あ此とれとよん。新ま此所子此さくく物ゆく。新宮よたくれち
やんとけれよ其すさま。けのよ初は復せし事とよたれんく。
大を成てすくや月のまらけま六雲かく傳とも。此をけあよ
とよん。此をたぐ世まらゆれわみちま。あすのあけま
あけわらま此。本此下ま。あれゆま。物もすまあん。あけ人あ
とよん。れを此まのまま。はして。始あまま。あつらん。あ
類のま。静あくく。此はの體よかあま。人ぬ。あけま。じ
くわ。う。う。ま。あ。あ。
是あ此。山まの尾入。あ。う。尾のなす。う。あ。あ。あ。あ。

新皇御記 卷之五

経印と云れけ。類のあふ。持ちて。之は。身や。あ。は。い。の。ん。と。や。も。は。
上の句より。身は。尾と。と。く。つ。以。起。し。て。さ。ま。ま。此。句。よ。り。其。
介。世。の。人。は。わ。れ。の。世。も。自。ら。痛。く。老。よ。け。ぬ。と。な。げ。き。く。

お。つ。れ。や。非。徒。れ。と。け。よ。や。と。此。の。つ。も。物。は。老。よ。け。ぬ。
の。の。と。あ。ん。し。身。此。世。は。と。や。う。さ。ま。と。い。ふ。さ。な。

わ。一。身。の。す。こ。く。入。に。衆。を。此。の。世。は。す。こ。く。我。が。や。り。
今。や。よ。め。の。世。は。自。ら。の。ま。ま。と。い。ふ。さ。な。と。あ。の。句。
さ。く。も。さ。な。つ。ふ。け。も。も。身。此。體。よ。か。わ。る。さ。ま。と。い。ふ。さ。な。は。
さ。か。ら。く。風。世。頭。の。う。ち。も。ち。や。う。減。出。具。の。體。も。さ。ま。と。い。ふ。さ。な。は。
さ。か。ら。く。乃。れ。の。義。と。深。考。不。く。さ。り。物。は。さ。な。と。い。ふ。さ。な。は。

詩此の義と云は成おを傳ふかくつやのほしと云は此の義を傳

二二六
之るふと月及、被の義と海、考不々、多、難、其、後、と、く、は、後、ふ。

詩此の義とが、其、我、わ、を、得、く、か、く、り、や、り、也、と、さ、し、は、得、此、の、義、を、得、
此、の、義、を、得、の、の、義、を、得、此、の、義、を、得、別、よ、り、く、わ、を、得、す、く、い、は、倭
歌、の、得、る、官、職、律、令、等、此、事、わ、く、も、思、得、く、家、の、り、く、漢、唐、と、は
か、い、く、建、多、る、事、ふ、に、得、る、と、名、実、齟、齬、を、く、る、事、後、也、と、い、は、
倭、書、と、く、人、を、強、く、牽、合、し、く、其、誤、を、信、せ、ん、と、い、は、く、は、
云、道、は、わ、る、く、多、信、以、傳、信、疑、以、傳、疑、と、い、は、く、は、く、を、此、の、ま
は、い、沙、汰、す、り、我、明、達、此、論、を、り、く、と、い、は、く、。

作文之續書よわ。

後教日ありて。況、其、事、合、せ、り、か、義、よ、し、く、い、は、く、前、日、倭、歌、唐、詩、の
事、を、得、り、く、事、を、得、く、事、を、得、く、但、倭、歌、と、我、等、あ、り、き、の、か、り、て

事はたゞ六つありてなり。一、其の文は、
地物にわたり、又、
...

すれ人のこれるをす。あつて、さうして、
今、世に、
漢唐以来の文と稱す。其中、
韓退之、原道、歐陽永叔、
蘇軾、
...

後公の...

上古人の爲すに於ては、そのありき、後うありき、其ともそのと

是は遺さざれば、けふは作法や書きかた、けふは又韓退之の答李翺
書、柳子厚答韋中立書、并は蘇老泉の上歐陽内翰書といふこと
知らざらん。之をば、けふもけふも著述の事とせば、務めて此力を讀書に
てしむべし。後主は、著述の逸せし事、そのさうさう、并節
とわきまありしなり。さうは韓柳歐蘇の文章よければ、天授此
材といふこと、さうして讀書よきを得るは、さうなり。今吾黨の文章、文
辞を考ふれば、必ずしも文章家とせんや、あらずしや。常は、其
よ辞を考へて、そのたのむ程や、さうさうも古文辞といふこと
は、いふ。今此後中、多々と、躁進ありて、之をく、^{ハシク}潜思讀書、よく、^{ハシク}
常に、^{ハシク}志著作、よく、多々、自ら文章を考へ、作、其れ指摘と求、治

どのようや田んす。あつてや指摘の益々大體文字程の中を
 中よ二二其疾病と為め。又々彼^{これ}於此^{これ}とす。今率^率多
 めて不成體の文字を多く乞求求らるるも公の如く
 法持法守と云ひ。材木等倫と云ひ。或々堂と後あり家を言ひ。
 或々棟と椽と椽と棟を二句。位在と云ひ。或は此と
 云ふも。修補するも。多く空を多き傾と云ふも。或は此
 也。今後此文字を指摘するも亦かくわたくし。爾^爾もあつて此
 道^道わらん。あつて。後中^中と云ふ。或は此と云ふも。他
 の切と讀^讀も。古文辭^{古文辭}と覃^覃思^思せよ。或は此にして。必古人の如
 く。或は古人の如く。或は此^此。或は此^此。或は此^此。或は此^此。或は此^此。

するも。或は此^此。或は此^此。或は此^此。或は此^此。或は此^此。

よはるる古人の跡をよむ。我々悦^{えき}懌^{えき}をいひたり。吾々久^よ時^よを奉^よ揚^よ

す。子夏の如くや。先儒の如く。著^し作^し一^し句^し。廢^せ世^せよ。ま
もわら。他^たは七八の力^{りき}。漢^{かん}唐^{たう}より。二^にの力^{りき}を他^たより。はる
かくて。月^{げつ}と日^{にち}と。年^{ねん}と時^{とき}と。韓^{かん}柳^{りゆう}歐^{おう}蘇^その如く。に
よ。他^たの如く。文^{ぶん}とを他^たより。熟^{じゆく}筆^{ひつ}法^{ぽう}の如く。月^{げつ}と日^{にち}
と。年^{ねん}と時^{とき}と。一^しの如く。遠^{えん}りて。まきの如く。

多^た錢^{せん}善^{ぜん}賈^が

座^ざ中^{ちゆう}に法^{ぽう}を文章^{ぶんじやう}に。中^{ちゆう}に讀書^{どくしやう}を要^{よう}とする。はるく。取^とる
者^{もの}の文章^{ぶんじやう}に。為^なる者^{もの}の書^{しやう}を。わらふ。と。はるく。之^{これ}の如^{ごと}く
きく。韓^{かん}退^{たい}之^{これ}の進^{しん}字^じ解^{かい}。規^きを。他^たを擬^ぎするの書^{しやう}と。はる
と。姚^{やう}如^{ごと}く。下^か大^{だい}史^し所^{しよ}録^{ろく}子^こ雲^{うん}相^{さう}如^{ごと}く。中^{ちゆう}に。柳^{りゆう}子^こ厚^{こう}。章^{ちやう}中^{ちゆう}立^{りつ}

卷^{まき}之^{これ}廿^{にじふ}五^ご 卷^{まき}之^{これ}一^{いち}五^ご 上^{じやう}七^{しち}

よ答を五書といふは此書と前よりして太史公より此二書は漢
も堅固以下と取らるるはとんえくひ。さると韓退之。答李翊
書。三代と漢の書はわらさるるは敢てよはれとわら。西漢書は
すくさし。也。歐陽東坡やと序は。此書は人を知る。古今此
書によるる。ハや。ゆ。也。歐陽。韓文と云ふ。東坡。孟子と云
ふ。といふも。多讀此四書とて。あ。よ。此のち。き。下。を。悟。入。す
る。あ。は。ま。ま。い。い。ま。り。也。南豊陳無己は伯夷傳を其くよ。傳
け。ぬ。よ。ま。已。ま。ま。ま。文法と云ふ。と。る。と。わ。る。也。古人多たかくの。と。今
伯夷傳をその下。に。人。を。う。り。ま。る。は。く。文法と情。れ。和。平。也。ち。ま。は。以
歸化の人。舜。の。礼。樂。之。論。と。わ。る。と。に。東坡。穎。濱。と。る。き。は。及。父。老。矣

は。ま。や。ん。常。一。書。と。枕。中。の。書。と。わ。る。と。よ。ま。ん。け。れ。ぬ。と。秘。之。見

歸化の入舜の礼米之論ゆの物とるに東坡穎濱冬見のきく父老長

たつやらん常は一書と枕中よりあはくよえけり。病く秘く見
甘やうと父のぬ所。初めうまおして入るるを子やをけりとも。
けりやあ書あも入る。おれたまき多く世より伝へし本ときき匠
老泉の批ひは孔子とく世の傳りとも。仍まとてしるる。そととていへ
さるとわらぬ也。老泉も月日終は秦と漢の書と入るる。そととて
と稽く恰个のふりや。かくおれと志伝し。そととて六多錢若賈長
神若舞といふとく。文章も多様とてく。とやうの也也。但先秦と漢の
書やとくも。卷帙浩繁ちりこうたんありて。吾位は材力あくとわうの。枕中記
の多也。そよとてく。翁とて中とてく。文記論とて此類とて勿論
く。老莊屈宋の他。淮南荀卿の書。さうて立明の國語た他。司馬

東坡穎濱

はまはらちのまはれも其後ありき。韓ハ其後ありき。歐陽ハ其

文辭を解せぬやると俗と云うてあつて。韓退之
文を解せぬ人より多く人益々少くして人益々多し。文の俗
人の多きはあつてと云うて。其後ありき。老子も下士聞道
大笑く。不笑不足以爲道とて。又之を俗と云ふ。其後ありき。
く。つが。韓歐。文を解せぬと云ふ。つが。其後ありき。韓歐と
するより多し。其も程朱と機ると同じく云うて。其後ありき。
つが。其も。己の思ふを云ふ。其の甚しきと云ふ。古人と云ふ。其
也。つが。其後ありき。其も。其後ありき。其も。其後ありき。

文章は盛衰

志はくくわく。其古今此文を論ずる。西漢此文を論ずる。其

割第^セ外^ノ賈誼^ノ過秦論^ノ司馬遷^ノ答任安書^ノ司馬相如^ノ論
 巴蜀^ノ檄揚雄^ノ解嘲^ノ類^ノ於^レ後^ノ其文大抵雄偉高邁^ノ後^ノ原
 之^レ為^レわ^レ氏東漢以後文章衰弊^ノ一^レ振^レ之^レ以^レ初^ノ也^ノ四六
 律偶^ノと^レて^レ子^ノせ^レう^レは^レ規模^ノ腐^レ盡^レ也^ノ私^ノ象^ノ妄^ノ蕭^ノし^レて^レ然^レる^レ者
 之^レを^レば^レし唐^ノより^レく^レの^レ後^ノあり^レ除^レ之^レは^レ也^ノ韓退之^ノ柳宗元^ノ
 二子^ノは^レ是^レも^レ起^レ絶^ノの^レ材^ノと^レて^レ一^レ生^ノの^レ力^ノと^レは^レ也^ノ古^ノ今^ノの^レと^レと^レ陶^ノ鎔^ノ一^レ自
 之^レを^レ機^ノ杼^ノと^レし^レ多^レと^レ也^ノ其^ノ文^ノ上^レ追^レ西^ノ漢^ノと^レ下^レ追^レ東^ノ漢^ノ
 坡^ノの^レ韓^ノ文^ノ公^ノの^レ碑^ノと^レ文^ノ起^ノ八^ノ代^ノ之^レ衰^ノ道^ノ流^ノ天^ノ下^ノ之^レ混^ノと^レい^レふ^レ送^ノ海^ノ天
 下^ノ之^レ混^ノと^レい^レふ^レ文^ノ起^ノ八^ノ代^ノ之^レ衰^ノと^レい^レふ^レと^レ異^レ論^ノや^レ異^レ也^ノ但^レし^レ此^ノ
 と^レい^レふ^レ其^ノ後^ノ代^ノと^レ摩^レく^レ漸^レく^レ衰^レ下^レと^レ歐^ノ陽^ノ東^ノ坡^ノの^レ二^ノ子^ノ相^レ繼^レ文

振起^レ之^レを^レ文^ノ事^ノと^レい^レふ^レは^レ其^ノ文^ノ光^ノ明^ノと^レい^レふ^レ又^レ過

古の如く、ひま剽ちやう竊とやま。そのまゝを、ひま五七文章科きま春帖はる帖の如く。
 為し。是と時文と好む。其古文と凡そなす。そのまゝに、ひま其ま。
 け阿あのまゝく古文の志を以て世に榮あし。後古矯俗きやうの志や、ひま其ま。
 韓柳歐蘇の文と、や赤熾とせし。一篇と大掬揚ちやう一句や、ひま其ま。
 藤ふじ草くさの如く。其ま。わまの材さい織オリと、ひま其ま。益えき畜ちく深しんく、ひま其ま。
 く。その如く、ひま其ま。古の如く、ひま其ま。雅みやび又また似にく、ひま其ま。最
 後、李り樊はん龍りゆう王わう世せい貞てい也や。その平易へい中ちゆう、膚はだ俗ぞくと、ひま其ま。厭いとく。
 相あひ詰つめの奇き怪かい此こ文ぶんと造ぞう他た。其こ後ご此こ神しんと、ひま其ま。洗せん洋やう自じ恣し。
 一世と鼓こ動どう也や。其こ後ご此こ文ぶん士し麻ま靡み也や。其こ後ご此こ文ぶん號ごうと、ひま其ま。
 其こ後ご此こ文ぶん盟めいと、ひま其ま。其こ後ご此こ文ぶん滄そう溟めい鳳ほう列りつ。常じょうに韓かん柳りゆう歐おう蘇その文ぶんは

標ひょう稱せうして、終しゆうは、ひま其ま。其こ後ご此こ文ぶん鳳ほう列りつと、ひま其ま。其こ後ご此こ文ぶん號ごうと、ひま其ま。

喜此を盟と稱しきや其滄溟鳳洲も常に韓柳歐蘇の文を

標表稱して終に服祿すれりとき既に鳳洲も晩年より文友と文
と稱してや後海して平中より其志わたりとも及ばざるにけり
よ。錢謙益の列朝詩集より下とそはゆるきなり今文章を
よくく自の作を人の王氏の集解と拾く故に四部稿と作記
やくすと今も又鳳洲の人多たひしく及く韓歐と毀るす我はと
そは得るなり定やくゆききとそわらふおわらぬおとふ見
やくとそはききあわらぬ。

日雲陽天作

今文おと朝もきりすやくとそは一人とそは一義理の六筋と
そは多きものやくとそはあすとしよと今世に儒者きりてあは

了きし柳と叔文の堂よりと。横と洛と并仇とある。いさよとては

君はたあめ。恥教せしむる。六字の形。何のうらなよと。今文を此
すはよるん。よ文と万の字。必義はよ根據し。識をく思ひ承し。
申し柳の文と精深雅健。や。氣格あま。雄拔しけり。横。二文と。
議編振容。此致明。嘗し。確ま。て。拔乃。て。凡。あ。と。も
て。韓。歐。の。配。し。て。愧。さ。と。あ。わ。れ。凡。や。明。朝。の。印。く。も。弘。治。正。徳。此
し。治。ま。く。ハ。文。章。と。よ。義。理。と。よ。や。せ。ま。ら。し。む。の。事。と。一。己。博
圃。の。傲。く。ま。る。よ。文。辞。の。馳。騁。し。て。義。理。と。よ。と。世。俗。此。文。と。よ。あ。く
この辞と矯飾し。て。文彩目と驚し。変幻百出す。い。や。も。明。眼
の人。一。た。以。初。は。その根。演。し。て。凡。ら。よ。あ。ら。さ。る。と。あ。ら。ん。し。陰。漢
風。列。等。の。文。を。や。ま。ぬ。か。の。二。五。れ。為。人。と。考。ふ。よ。於。率。於。儼

浪笑教の友もやうやうに経る志氣沮喪志のゆるゆる故態

妻々て秋氏に帰依し伽藍と建ち又弁外此園と号して月
夜賞客と其中に宴遊し歲月と改唱しゆれやあはれとよきわ
やいしき社友と錫爵の女は丘尼とやうく性膽教門とてと
風列とての才子とてとて其尼とてと曇陽大師と號し錫
爵と同一く結廬戒食しとてとて賞客と謝し筆硯とやき
胡夕枕誦とのをゆけりや希有やゆりやとてあつともてに
も多及やう志して病好と志しすわると又物と請人酒客
の同よのやゆりやゆりやゆりや名はやく風列の爲
人と考ゆ病ね喪人の人似てや物も博圃宏詞名とて稱む
ふあり同俗金汚衆と収るふ多とあつて其成よとてと地を此

一とていふは、その子卷万卷此書讀ゆくもその書よを
 と精志す其多し、はる中と註と多し、讀ゆして其益と
 うはるく、寸鉄人を殺し、一寸其鉄やもよく、能く人と殺
 ぶ多し。長乃吳多と、とて、まゝ、まゝ、と、用はた、魚、子、海、を、
 び、東、坡、自、う、西、漢、書、を、る、个、一、本、を、い、中、治、道、人、物、地、里
 官、制、兵、戎、貨、材、の、類、一、過、あ、ま、ち、一、本、と、ま、や、し、く、は、
 史、と、傳、作、く、事、く、精、覈、か、ひ、と、や、虞、邵、序、を、と、今、
 教、と、讀、書、の、良、法、と、一、也、今、け、は、志、の、ひ、ん、大、經、左、傳
 遷、固、の、史、と、文、書、其、為、と、う、ん、中、を、義、理、事、實、を、合、負、と、せ、
 多、く、文、書、其、一、筋、と、ま、や、し、く、と、し、く、志、を、志、分、と、ま、や、し、
 多、く、文、書、其、一、筋、と、ま、や、し、く、と、し、く、志、を、志、分、と、ま、や、し、

一、かの、つ、ハ、を、精、志、す、事、を、取、之、り、と、ま、や、し、く、其、日、の、

多し文書一筋とすやうくよむべし。高き方より低き方まで

一かたはハを楷書くすやうに成るべし。そのまゝつまきく筆目も
旧法とすべし。その一は字例文字と別れ此例なり。多しハ葉乃
徳のりあり。参其同く補字とす。其月以字なり。茶連
同く浮字とす。その月以字なり。文字中亦あり。勉字勢
字同くはらひるやまも。其うち異なり。信字敬字同く
くはらひるやまも。其うち異なり。衣期同例の字皆
其同字とす。同例の字は其同字とす。其うち異なり。凡
はこれ等とす。凡く象棋とす。凡く。必月以誤なり
多し。多し。其外の文字も一字のまゝハ一字此徳なり。馬兵乎
哉。此助字は多し。同字とす。やまも。わまも。少し。此の

後漢書

之。疑似するもあまは、さう古人の用ひし例と似る考、後
 とが、何しとん、なま、さうと、さう。其の語類字が、やると成
 語とや、其類一が、ん、改作、係ら、語、あ、と、其、或、か、以、語、あ
 了。人、此、體、以、係、れ、語、あ、了。本、此、措、了、係、子、語、あ、了。古、例、此
 語、あ、了。比、喻、の、語、あ、了。其、亦、あ、け、く、い、之、了、ん、必、し、も、其、終、了、す
 之、も、以、中、ら、わ、く、し、も、其、成、語、と、多、く、記、し、く、其、中、も、轉、化
 せ、た、あ、の、ほ、ろ、に、辨、あ、り、て、信、お、ろ、ん、事、あ、り、て、迂、か、ろ、ん、其、之、六
 鋪、叙、信、と、補、く、章、段、と、な、れ、と、い、ふ、事、も、那、分、類、聚、の、不、あ、る、交
 互、錯、綜、の、所、あ、る、と、と、殺、ち、の、産、く、書、と、布、の、贈、く、き、と、乃、分
 る、其、中、に、體、裁、補、叙、と、さ、く、首、尾、と、あ、れ、と、い、ふ、也、起、場、の、

承接、轉折、收結、文、際、抑、揚、頓、挫、條、貫、此、等

多し其の中を體裁浦叙よりして首尾とせしむる也。起承の

承接あり。轉折あり。收結あり。文路此抑揚頓挫條貫此序
理するやん多し。此は法とてよくある。凡そとよしむるは加之
歲月此切せしむるはあはけり。自得する所あるん。筆を下し文を
る。用字に誤りて造語はやくしむる。鋪叙体も體裁正しく
言と多く送と稱するの助けとするよあるん。一は文字と
よくわきまを認るべきなり。あきとてく。字向の事とせし。浮虚無
實此甚しきところなり。其文雅風流を道にするよややあは
しく異なりあるべき。今かくきくするも人知部は細らうし
第も其麗なりとせし。今世の学者多くは後みく実好と
んとせし。多し文辞は馳騁して虚譽を求めたり。今かくきく

後漢書卷之五十五

論語集注卷之五

唯需者若多則痛く懲止むも好むとす。況や道、文、雅、風、賦、詩、書、春秋、禮、樂、射、御、書、數、六藝、之類、
さるべき且之道とす。禮、文、詩、書、春秋、禮、樂、射、御、書、數、六藝、之類、
文、詩、書、春秋、禮、樂、射、御、書、數、六藝、之類、
の文章、乃、禮、樂、射、御、書、數、六藝、之類、
は、文、詩、書、春秋、禮、樂、射、御、書、數、六藝、之類、
樂、云、鐘、鼓、云、乎、哉、との終、乃、禮、樂、射、御、書、數、六藝、之類、
は、文、詩、書、春秋、禮、樂、射、御、書、數、六藝、之類、
言と身は文

能かしく思ふ。口を閉ずると云く、言は連續を

言と身此文

能かひく思ふ。口と身すりとなく。言此連続を
ふとなく。言此連続を。言此連続を。言此連続を。
文字は字はとなく。言此連続を。言此連続を。
多し。後世文字此辭と文辭といふを起る。文辭は
言と身此文。言と身此文。言と身此文。言と身此文。
わす。文辭とこの辭事や。言此連続を。言此連続を。
て多し。孔子も多し。言此連続を。言此連続を。
も君子と一となく。言此連続を。言此連続を。
主と三復。言此連続を。言此連続を。言此連続を。
ハやう。言此連続を。言此連続を。言此連続を。

後世此言

卷之五

此七

丁多於... 世其儒者... 好學... 人... 多... 氣... 鄙倍
 とをきく... 或は... 戯謔... 奴隸... 類
 と爲す... 貨利... 其... 委巷... 奴隸... 類
 似... 文雅... 安... 文... 文... 着...
 一... 鼓... 等... 古... 文雅... 似... 優...
 還珠... 類... 文雅... 似... 優...
 孫叔敖... 况... 似... 孫...
 叔敖... 在... 中... 岳... 世...
 全... 事... 法... 似... 似... 似...
 今... 全... 似... 似... 似...

といや... 好... 似... 似... 似... 似...

今迄とやうて付るは、
大切なる也。

とやうに、
裁きくさ、
兵家利害此金銀、
中とやうに、
一。今迄と又との、
生死此場今迄の事、
我う。よ、
は、
子、
其、
六、

命をいへるるを、後にはさすことなるも、義は降く
 塵芥も、も抑えず、いと其邊の、いらんや、今迄は、あはれ
 ことなる、ち切の、ものや、六常は、又、此、ま、生、を、け、り、今、迄、も
 わ、れ、費、つ、か、や、一、月、ひ、さ、ら、さ、ら、さ、ら、わ、れ、な、き、ま、し、と、い、は、さ、今、亦、し
 今、迄、あ、の、う、か、ん、な、お、と、ひ、ら、も、い、か、ら、商、賈、や、と、ま、た、似、合
 る、と、く、一、ち、ち、ら、わ、れ、う、き、ま、ま、ま、む、一、小、次、の、書、や、く、見、ゆ、
 唐、此、柳、公、権、う、家、ま、え、一、一、は、一、婢、わ、ま、一、一、柳、家、と、い、く
 揚、巨、源、う、家、は、は、な、一、一、夫、人、猶、と、買、や、く、自、ら、牙、儂、や、
 價、の、高、下、と、裁、せ、と、い、く、俄、は、驚、疾、と、い、く、揚、家、と、謝、
 去、る、其、後、は、む、し、ひ、く、こ、も、ま、ま、の、柳、家、は、わ、く、一、に、終、
 内、

此、自、ら、め、と、い、物、此、價、と、同、き、ま、ま、と、き、い、く、去、る、夫、人

たるべきとき、以てましくも、いかにわが老人の物を、をよ。胡
 鮮陳の、何れ根を、使中、と、然、然、使、よ、行、く、家、貧、く、て、支
 度、や、を、つ、く、る、も、は、ま、は、之、好、新、意、と、も、く、も、是、の、如、水、を、銀、百、枚
 と、も、を、け、れ、ゆ、お、し、て、後、新、意、を、同、く、し、て、や、あ、の、こ、も、け、り、と、一、れ、と
 い、ひ、し、如、水、を、買、ひ、し、て、ま、は、ら、く、わ、り、と、入、ま、よ、ひ、と、さ、さ、に、を、以、
 鯛、と、之、枚、を、お、は、り、て、其、骨、と、も、今、吸、め、あ、り、て、あ、や、い、つ、と、
 友人、聞、く、く、る、ま、き、し、け、れ、酒、と、も、も、く、之、好、酒、と、わ、り、て、
 と、く、あ、つ、け、如、水、を、買、物、を、ま、か、ゆ、め、あ、つ、く、ま、わ、り、今、刀、す、る、ん、の、
 下、や、く、せ、し、い、わ、く、か、る、せ、も、ま、な、ら、し、て、や、な、れ、作、食、の、さ、や、
 之、く、い、鯛、と、も、も、く、る、ま、き、し、け、れ、酒、と、も、も、く、之、好、酒、と、わ、り、て、

たり、ま、き、す、と、も、思、ひ、が、ら、い、ま、く、朋、友、を、あ、れ、此、落、ち、と、流、石、と、お、し、

くひ一鯛もくすふとちひれ。ちもたれまかへくすふ。

オトキマキとも思ひやうに。さく朋友を此為ちと流石にせむ
る。いともおもひ。きき此事やとも昔時代の士は信儀素質
を少くあつても義を志し。心も潔白なれば。ともまゐらる。先
つゝき時の事と。おもふ。其のまゝも年々のき入りたるあつて
候の事と。かともおもふ。さる。女文は。いさへして。赤らする人
も。ともあつて。古戦軍形。此事と。聞え。いさへ。一君父の奉
ふ。武士は。覚や。いさへ。金蔵。せ。いさへ。高代。わ。き入の。お。合。ま。ま。に。
多くハ。揚子。損。得の。と。や。いさへ。女文。を。奥の。事。と。い。ま。は。信。儀。
あ。や。い。一。在の。所。と。せ。さ。ら。と。や。い。い。け。い。さ。十。年。の。あ。と。と。格。別。の
風。よ。う。や。あ。の。と。ま。又。甚。し。い。加。賀。ま。ま。地。守。女。と。い。ひ。い。さ。わ。る。

後集巻之五

其子病るといひし者も病む。七女ありて其父家女の子ありし
りやとて人ともどもよく身とすすむ世はわれすまきと
も世等必ずしうんがなまけく彼はほめられし。きりかくつ
く我は得ぬ時基家戯は務多れやとちひらき世等の
やると傳へし。やんやうくまはし。世世きんあまかた
かくら多くとよれし。又々多きあまやうく買ぬ。あま
かゝまるとやうに。いかに商賈たよまし。きんあまの
くいものききとやま。又々子新井院後と。いひしとまはる。
人の心もつとくをまき入とま。いかにきすの。金取不
そとあまのま。金中と。いかにきわぬ。とまきと。あまの
鹿

病の唐名ときあゆぐ。侍講のとき。

と云ふは、今中より、きかぬ、と云ふは、と云ふは、と云ふは、
と云ふは、今中より、きかぬ、と云ふは、と云ふは、と云ふは、

病の唐名ときあゆべし。待講のとき

文廟ウツも、とけぬ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、

古き、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、

いふ、あきら無擇言、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、

の、子文雅風流、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、

今身の、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、

と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、

と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、

けり、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、

一日の澤

家住駿臺下。門臨萬里流。隱雲平野樹。棹雪遠江舟。

吾老愧安道。客來答子猷。草堂偏閑寂。喜共故人遊。

とよまのうまの地ふる長流の俯しとよまの門をわたりて雪の舟
しゆゆの今此詩の門の條萬里流と云ふはとよまの舟なりと云ふ
ゆゑに云ふまはしきうの句勢われやとよまの舟なりと云ふは
韋蕪列の野渡無人舟自横といふ類なりと云ふは詩の
詞は泥くしとよまの舟なりと云ふはとよまの舟なりと云ふは
多く詩を好まぬも好ましくいふは詩の舟なりと云ふは詩の舟なり
と云ふはとよまの舟なりと云ふは詩の舟なりと云ふは詩の舟なり
と云ふはとよまの舟なりと云ふは詩の舟なりと云ふは詩の舟なり

冬天衝雪到君家。此日倚欄眺望賒。兩岸水寒如夾鏡。

中々く人々く下者も一着候せしとて少くも年徳を授け一人

又 夫衝雪到君家。此日倚欄眺望賒。兩岸水寒如夾鏡。
千林樹合似開花。

又 天從雪後海寰新。積素凝華先入春。清白由來誰相
似。草堂高卧是何人。

又 欲向駿臺卧雪時。行吟招隱太冲詩。古人高義今何在。
此地無君誰共期。

又 前の翁の詩の韻と和し
高堂坐僻地。積雪暗長流。歸騎迷來路。漁人滯去舟。

後集卷之五

四

新編 卷之五

行藏論古道 經濟問 嘉猷寄語 世間客 誰知塵外遊

そまをて送よ 喝わいけりか かくて酒酣又うら 福はねも今すあ

くあう 魚んごとのまんやうけり 存中又世は 紛々々 散樂此

謡よよき人わうとふ 能其人よ一曲とすり 肩上の笠よと云

影の月とてさけ 擔取のまへよけ 不香のささる所 けくや

こゝろがけりぞ 此意もつとく けり 翁おきとて けり

よくよき思ひよき 道は 山家雪中の 寒氣とて みるも 又さる

やとく 徳川よ 珍く

六出 蒼理 三徑平 忽聞 白雪入 歌聲 市中 懸酒 酒家 近

堂上 開書 書帙清 玉樹 玲瓏 四隣 合銀 沙的 皦一 川明 幽

棲何減 山陰興 莫厭留 談列日 傾

堂上開書書快清玉樹玲瓏四隣合銀沙的皜一川明

棲何滅山陰興莫厭留談到日傾

諸客よいひけりし律詩ハ文字此よりいひてや言要
 少年よいきまえひくも相見せぬとわす又一字
 く景趣よすすれとて味やまことわす月他此詩よく
 一よ出ても志ばしく思とよわび結す一白此平字の
 一よ字はして二程のきまもわくゆふは埋るゆ
 中二句ハ文字眼ともする法是此謡と白雪此曲は下
 の雪は舞よと下よ志趣わかしくゆふは向此合字の
 中雪の樹此謡とゆふは向此合字の
 銀沙よ此一の皜の皜と明字的實よく力わたりよ

法華抄卷五

四十五

海は碇くわするふくく。あまきとくくかあたのしきまきま

やうてきとくく。百日此蜡た一日の澤爾た所知たわらるる修たま
や孝け義ぎよふふ多た民たも四時稼く穡そくと勤こめく。歳終さいしゅうよ一日いちにち始
酒宴しゆゑん樂らくくく百日此方たと忘わすれ。乞こ乞ここれ遺澤たわらるる。氏うぢのわ
く勤きん方ほうは張ちやうくく相あとよは悉しつはは樂らくしと知ちくく。君子くんしも同
まき樂らくむくわらきと。子こ貢くわん其そのあふんけりきぬとがくの終しゆうふ
やうてき。まき六む翁わうも結むす君きみも結むすとよは作酒宴しやくしゆゑん樂らくくく。一日いちにち作
賑にぎと樂らくむけをまお作しやくはやと。昔むかしも時ときも蜡ろうの了りやうはわらるる。今日けふ
の金かねとたふめぬ一日いちにちの澤たもす魚うしほも。我われ等らはとまき。民たみのあま
稼く穡そくと勤こめすくわらくとも。若わかき子こも忠ちゆう信しんと脩しゆうめ。仁に義ぎ
の道みちと世よも。ゆらうて。凡たゞ教きやくと助すけらうと。忘わすれくく。ん。乞こ乞こ此

後漢書卷之五
四六

澤々答揚こいしん。不報ふりの報はら羊や魚い。信しん必ひつ一いつも官くわん多た職しやく。
任にんすすととのの國こく家けとと報はらすすとと、ととんん也や。

む物人ものびととと好このむ

翁弱冠おきなのの後のち也や。ああししんん左さ佐さとと稽きくく。叔向しゆくきやう。毋な此こゝ也や有あるる在あるる物もの

足た以を移うつ入り苟な非な德とく義ぎ則すなは必かなら有あ禱たうとと、たれ以を移うつ入り苟な非な德とく義ぎ則すなは必かなら有あ禱たうとと、たれ以を移うつ入り苟な非な德とく義ぎ則すなは必かなら有あ禱たうとと、

戒か肝かんののららもも多たきき也や。倅はとと龜き鑑かんのの名な言ごんとと、か肝かんののららもも多たきき也や。倅はとと龜き鑑かんのの名な言ごんとと、

の移うつ入りとと伯夷はくいのの後のち也や。柳下惠りゆうげのの名な言ごんとと、の移うつ入りとと伯夷はくいのの後のち也や。柳下惠りゆうげのの名な言ごんとと、

也や也や。夫こゝも志しとと喜よろこぶぶ事こと也や。拊ふ下げ惠ゑのの名な言ごんとと、也也や。夫こゝも志しとと喜よろこぶぶ事こと也や。拊ふ下げ惠ゑのの名な言ごんとと、

夫こゝも志しとと喜よろこぶぶ事こと也や。拊ふ下げ惠ゑのの名な言ごんとと、夫夫こゝも志しとと喜よろこぶぶ事こと也や。拊ふ下げ惠ゑのの名な言ごんとと、

也や也や。夫こゝも志しとと喜よろこぶぶ事こと也や。拊ふ下げ惠ゑのの名な言ごんとと、也也や。夫こゝも志しとと喜よろこぶぶ事こと也や。拊ふ下げ惠ゑのの名な言ごんとと、

聖せい天子てんのの同どう也や也や。孔子こうし韶しやうとと、聖聖せい天子てんのの同どう也や也や。孔子こうし韶しやうとと、

茂文も敦し人となすやわらば其極と云ふ。舜の韶孔子

聖天子の同此大を也。孔子韶と云く好く二月肉味と志す。又七十子好舞と云く親炙しと云く好く又人と好むの事ありきといふ也。其不忠臣孝子高潔義烈の行世人と感慕せし物なり。其類や。あつて徳義の類と云ふは。後せん。ちようふ。ふしき。梅をばふしき。い。此禍。わらん。い。徳義の類。よわ。と。て。人となす。儀狄。酒南威。等。と。い。及。ん。其。不。錦。繡。珠。玉。珍。禽。奇。獸。を。い。つ。ま。人となす。と。云。ふ。と。い。は。れ。物。也。その。の。ま。好。む。と。云。ふ。大。や。り。ら。必。身。と。い。は。れ。よ。と。滅。が。ふ。ふ。や。り。ら。必。名。と。辱。し。め。咎。と。折。ぐ。古。今。歴。く。や。し。て。考。ふ。詩。文。書。札。を。い。く。ら。儒。者。は。す。い。は。れ。と。い。は。れ。

茂文の書

て又闕角^{くわくかく}く^くん^ん。御^ごも李杜^{りて}摩詰^{まきつ}の詩^し韓歐^{かんおう}東坡^{とうた}の文^{ぶん}二玉^{にぎよく}
 の書^{しよ}のあ^あま^まき^きら^ら。そ^そも^も又^{また}古^こ今^{いま}此^{こゝ}の^のゆ^ゆに^にい^いわ^わせ^せ。若^{わか}し^しの^の人^{ひと}も^もあ^あら^ら
 ぶ^ぶる^るも^もの^のわ^わら^ら。若^{わか}し^しも^も亦^{また}亦^{また}あ^あら^ら。て^て徳^{とく}義^ぎの^のお^およ^よわ^わら^らん^ん。あ^あの^のあ^あ
 り^り古^この^の詩^し賦^ふと^と好^{この}む^む文章^{ぶんしょう}と^と好^{この}む^む此人^{こゝの人}多^{おほく}く^くつ^つん^んと^と投^なげ^がし^し亦^{また}亦^{また}と^と
 す^すく^くあ^あら^らん^ん。瘦^{しう}處^{ちよ}せ^せら^られ^れと^とや^やう^う。や^や亦^{また}亦^{また}あ^あら^らん^ん。云^いふ^ふ臨^{りん}此^{こゝ}雄^{ゆう}偉^い
 と^とあ^あら^らん^ん。幽^{ゆう}凡^{ぼん}其^{その}又^{また}馳^ちら^らん^ん。雕^{てう}鏤^{りやう}の^の巧^{くわう}と^と街^{がい}や^やら^らん^ん。又^{また}は^は
 お^おの^のく^くの^の益^{えき}の^のあ^あら^らん^ん。道^{だう}は^はあ^あら^らん^ん。や^やあ^あの^の得^{とく}ら^らん^ん。あ^あら^らん^ん。あ^あら^らん^ん。
 若^{わか}し^しも^も政^{せい}物^{ぶつ}喪^{そう}志^しと^とい^いふ^ふも^も。この^{この}好^{この}書^{この}の^のあ^あら^らん^ん。最^もも^もと^とい^いふ^ふも^も。志^し
 唐^{たう}の^の太^{たい}字^じ此^{こゝ}明^{めい}と^とい^いふ^ふも^も。遺^い余^よと^とい^いふ^ふも^も。蘭^{らん}亭^{てい}の^のい^いふ^ふも^も。指^さす^す
 一^いつ^つの^の目^めと^と知^ちら^らん^ん。一^いつ^つの^の目^めと^と知^ちら^らん^ん。一^いつ^つの^の目^めと^と知^ちら^らん^ん。一^いつ^つの^の目^めと^と知^ちら^らん^ん。

たるまよふとけ詩賦文章文字これをも。おののね人とのやる。聲也

いさゝ、月^{つき}と^{あつ}知^ちらふ。と^い極^{ごく}人^{じん}と^い精^{せい}成^{せい}文^{ぶん}事^じも^い事^じ。

あまよよとけ詩賦文章文字^{しひぶんぶんご}はれも。ちの極人^{ごくじん}とのやる。聲^{こゑ}は
の極人^{ごくじん}そらちひ。必^{かならず}しも有^あ禍^{わざはひ}といふ中^{なか}にあつて。人^{ひと}とて虚^{まよ}
文^{ぶん}よそ也。実^{じつ}用^{よう}と志^しし。道^{みち}は客^{きやく}なりといふ。人^{ひと}は。翁^{おきな}老^ら家^か
の高^{たか}祖^そと^い論^{ろん}する。之^{これ}を^い文^{ぶん}事^じと^い論^{ろん}して。おと^{おと}死^しく。学^{まな}ぶ^{まな}ぶ^{まな}
詩^し賦^ひ文^{ぶん}章^{しょう}よ。おけ^{おけ}れ^れ。學^{まな}者^{もの}の毒^{どく}業^{ごう}は。用^{よう}の^いよ^よく^くや^やり^りし。
其^{その}毒^{どく}ぞ^いく^く治^ち病^{びょう}よ^い多^たく^く。人^{ひと}と^い教^{しゆ}を^いま^まむ^むと^いさ^さら^らし^し。し^し。
詩^し懐^{くわい}よ^い多^たく^く。文^{ぶん}章^{しょう}と^い辭^じ達^{たつ}よ^いた^たく^く。ゆ^ゆく^く好^{この}ま^まら^らし^し。
と^いゆ^ゆく^く好^{この}ま^まら^らし^し。必^{かならず}其^{その}毒^{どく}よ^い中^{なか}に^いし^し。と^いま^ます^す。詩^し賦^ひ文^{ぶん}章^{しょう}も^い一^{いつ}種^{しゆ}
す^す。今^{いま}不^ふ達^{たつ}の材^{ざい}と^いく^く。と^いは^はさ^さす^す。其^{その}と^いせ^せら^ら。必^{かならず}歳^{さい}月^{げつ}と^い費^ひす^す。
学^{まな}問^{もん}の功^{こう}と^い妨^{たが}は^はし^し。韓^{かん}愈^{いゆ}の文^{ぶん}と^いま^まり^り。事^{こと}と^い月^{げつ}と^い叙^{じゆ}す^す。

後^ご世^{せい}の^い事^じ 五^ご

四^し紙^し

漢書卷之九

とん多ふ處若忘行若遺儼乎其若思范乎其若迷

とん翁あふあおく嘆息してゆく韓愈の為よおん

本と之ん嗚呼韓愈の材ととくんと道とをよ用ら幸かくの

あそ廿九取を管するも能くあそむるわん多ふその字子

文辞の向よりまよとく。已に實得此族と見るとし行

竹博遺位の楽よりと曠し。例列は流さるる時を大類

勤るまよとくやうし。其根原とあるのねらふ文章此の誤

所よりあそくゆらまよとくつけくも程若此まよとの新文と心

と、ゆりやうまよとくあそくらよ新文と禁絶せよやうあ

に。詩文の極人あそくあそまよとくやうし。まよとく程若此の

に。詩文の極人あそくあそまよとくやうし。まよとく程若此の

慮る事の遠きと若君よく思ひ知れんと六部若く六部日能

以詩文の極人なりと云ふも亦さう云ふやうし。も亦く程才遠への中

木ゆえ

慮る事の遠きと君よく思ひ知れんと六部常の六役日觴休

のおそひは陪従ト又爲此刺戒と云ふ六部は樂く流せんと

中魚ト詩よと好樂者荒良士瞿々今日此謂やくと之

樂ともい終やと學問了らんと庶幾と宴安の鳩毒と情ふ

中らるやとくんとそとれおの初中くんと各共謝の體よ

及之と冬日のかりやく行やくとあせりと時よやくとハ法

ともよ終よとぬまのくんとやとをけり一人のさやとく

暮下駿臺雪滿蹊漫々平白失東西一條正路依然在

知我同行醉不迷

かく月詠けりともとを吟賞とくけ侍有心かやと

了之して、名已る家路よするべし。

年よさるる

朔風さくふう感あは夜よやうして日ひ重かさ又また例たと去さきも也やすやううには。
 講こう令れいもも志しほほくくややくく後ご日にちとと約やくせんとししをを了りせせれれ今いまここと
 おおひひをを著しるるにに例たとのの人ひとのの翁おきな。起おこ来きとと同おなじじくくををししに。
 翁おきなひひくくのの後ごをを年としのの著しるるにに世よををととそそ、そののははく
 了りせせれれせせるる多おほくく市いち朝あさはは作つくららしし翁おきなのの草くさ堂どうはは去さのの著しるる
 ずずとと傳つたへへしし。蕭しょう瑟せきのの環かん堵との中なかににつつくくととややくく疼いたみみ外ほかにに日ひと
 おおくくとと傳つたへへ六月りくがつののすすまま年とし此こゝ著しるるもも是こゝのの傳つたへへんんとと著しるるのの
 遊あそびびおおひひよよ多おほくくたたくくああららししままるる年とし了りせせれれ甲か斐ひも

かかののひひののくくをを著しるる身み老おい年とし積たままりりけけははくく朽くち果くちひひししをを今いま

遊々おもしろく多うた。たゞあしきまゝ年々為すひ甲斐も

かゝりしやうく老ゆく身老年猶く。けはく朽果じしを今
後悔くもわがあはれずやとて

かゝりしやう古歌を打てん。年々せむらひくやとては

法を聞くとし。衛武公行年九十のや。雅箴傲於國ては
苟在朝者無謂我老老而舍我必恭恪於朝夕以文戒我

や。抑戒の詩と作く自傲をうたふ。今翁ももてや
とて。さう。武公の年々及せん。今や。期頤のよきと云く。

月と徳とす。まゝのや。あしき。祝く。法を子々しく傳へ
せり。今も。天下の阿蒙や。じく。まゝ。さう。さう。すまなく。

後集巻之五 五十五

多年此の教育とじやあつていふ。材質の庸下なる故とて
 中やうのし。学文此つとあつたよとけ家のこころをもあつていふ。
 汗教くしだえも多ぬ事なくいふ事と此善誘ぜんゆうもあつていふ。けつあつていふに
 送まわつていふけあつた事とあつていふ。けつあつていふに
 一々。日夜進益しんえきとていふとていふ。あつていふに
 やつていふ此効こくと得とつていふ。あつていふに
 聞きく。あつていふ奇特きせきとていふ。あつていふに
 てあつていふ先名せんめいとていふ。あつていふに
 了しやうつていふ佩服へいふくとていふ。あつていふに
 だつていふ企くんでていふきまわつていふ。あつていふに

老たる人此作はとすくまき事なくいふ。あつていふに
 春秋列國しゅうしゅうれつこくの人物と

かま^{くたて}の企^{くたて}はきまわ^くひ^くも。其老く自^く做^くれ^くう^く八^くお^くそ^く年

老たり此作はとすくま^くす^くやく^くの^くな^くひ^くと^く春秋列國の人物と
論しておも^くく^くひ^くく^く春秋の附衛はあ^くく^く二人此大賢わ^く諸候
きた衛の^くき^く大^く史^く中^くと^く蘧^く伯^く玉^くけ^く二^く賢^くと^く道^くと^くん^くの^く事^く真^く事^く
と^く好^くし^くと^く篤^くく^く皆^く聖^く人^くけ^く流^くま^く伯^く玉^く寡^く過^くと^く欲^くと^くや
も^く未^く能^くや^く一^く事^くし^くて^く早^く九^くと^く此^く非^くと^く考^くて^く十^くし^くて^く字^く化^く
すと^く之^く解^くき^く此^く自^く做^くく^く我^く過^くと^く聞^くし^く事^くと^く求^くると^く若^く後^く相^く此^く
て^く自^く治^く誠^く切^くや^くる^く事^く一^く事^くと^くし^く。孔^く門^く七^く十^く子^く其^く中^くは^く也^くも。
顔^く曾^くは^く中^くと^く多^くく^く得^くや^くと^くう^くと^くは^くく^くた^くは^く列^く國^く君^く太^く夫^くの^く賢^く
とい^くも^くあ^くら^くわ^くら^くと^くさ^くと^くは^く名^くの^く版^く徒^くの^く篤^く實^く光^く輝^くと^くい^く
ま^く今^くも^く人^くぞ^くて^く子^く載^くの^くり^くも^く真^く起^くせ^くし^くれ^く我^くに^く。翁^く老

後漢書 卷之五

多事之も。今よと謹く法者の祝規とせしむ。汝生と終む
 としやあまひは法者のあまきと。春秋よそ材力またたけ
 懈ほろゆるく日よそ進まふ。つそ古人よ及そそるべきは
 月々恃たのじよあま材力と多そするよあまた。た。攀く汲くと
 して勉つとめく不息よあま。な。と。悠ゆるくそそ日と涉わたふ。一旦
 年ねん老齡傾ひうく後日了結の懈ゆると思ひそ。い。悔くも。わ。其その意
 わゆるも。即今翁の身はとそそ。と。古た劫も。少壯不努
 力。老大徒傷悲。乎。と。陶淵明も。盛年不重来。一日難
 再晨。及時當勉勵。歲月不待人。今と。古人もけ感懐と。同
 乎。か。そ。刀。也。し。そ。等。此。詩。句。時。々。吟。詠。して。勇。進。の。志。を。振

起す。又世傳る宋文云此知此文。

しやをそりし。そ等其詩句時々吟詠して。勇進の志を振

起す。又世傳る宋文云此知此文よ。

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日

月逝矣歲不我延嗚呼老矣是誰之愆。

此文本集より之及。宋子家刻不自棄の文也。此亦宋

子其少作。之を後人擬作也。若と宋の作す。や。も。わ。ん

ふ。より。彼の作もせよ。言若とて意も明白也。若とて打え

る。く。自。警。む。り。より。若とて意も明白也。若とて打え

陶侃の語也。大禹聖人乃惜寸陰。至於衆人當惜分陰。豈

可。供。遊。荒。廢。生。無。益。於。時。死。無。聞。於。後。是。自。棄。也。と。之。の

了也。孝之立志のけし。孝の例明の詩も。曩祖

縁やうも冬どかけ炭やうきく樂々くはれど回りの人々もい

うふすけはさくは申さくはやめよりやうのは其人のうすは中
此月やう一生のあはわらへせ。是も一生此月かき我肉やうまは
わら柔湯とする月あはれとつやうや。家あはれとほき異
解んやう。其後もあざうまきあはれ道な志は。け人の柔湯と
あはれやうあうやうし。ともやうな須臾も離るうらまは
一生の間なとけ月あはれさうさうやう。おさききうはれわは
あはれさうさうやう。あうまき急迫さうさうは。多し僅
やうて有得さ。皮膚の向よてやうん。い。か其截と齧て
滋味よ飲あとあうき。況や急迫やうまは。う。まはなぬあまは
い。あう日あはれやう及んは。う。やう。倦怠するまは。あうん。あは

之愈々く。其間を勉勵と要とん。多々急あつて迫切なる智
 たる。義理と涵泳と貴ふ。緩あつて懈弛する。戒む迫切
 なる。弛ゆる。学者進脩此道にあつて。後急相惜む。肯
 づからゆるまふ。程子のいへく。志道懇切固是誠意。若迫
 切不中理則反為不誠。又曰人謂要力行亦只是淺近語。這一
 點意氣能得幾時了。諸君程子此言を以て。翁の注あつては
 とす。子もをこし。

壬子試筆此詞附

日月送夕。白駒の浮遊や。衰病日侵。黄金此
 物如。

老れ波よまよふ。あつて七十あるを。又はの壽中。

御女... 十六... 大馬... 思... 一

... 老... 疾... 國... 年... 程... 鄒... 韓... 文... 耶... 步... 世... 盛... 衰... 枯... 一

やうかくやん年とあつて後ひのちなりし。

けしちもがはうてゆむとすよおまのひの道とあつて。

此の記と云ふに辛まはれしとあり冬と記すと徳生と信す。

雑話、以書集しと云ふ。たゞ一子此よりす。年と記すと秋と記す。

稿と脱しぬ。やと云ふ。や一き延のこころなり。と云ふ。朽也。

吾黨よのうく信す。や。後、是れ身と首子方一此助す。あしんか。

一。あつて。い。試、其れ。と。あ。あ。附。と。信。と。く。後。也。

ア。を。窮。よ。あ。あ。の。と。と。あ。い。け。れ。と。也。

享保壬子のやう。冬十月鳩巢志を記す。

駿臺雑話卷五畢

